

# 霞

—2019年度夏季展示室だより—

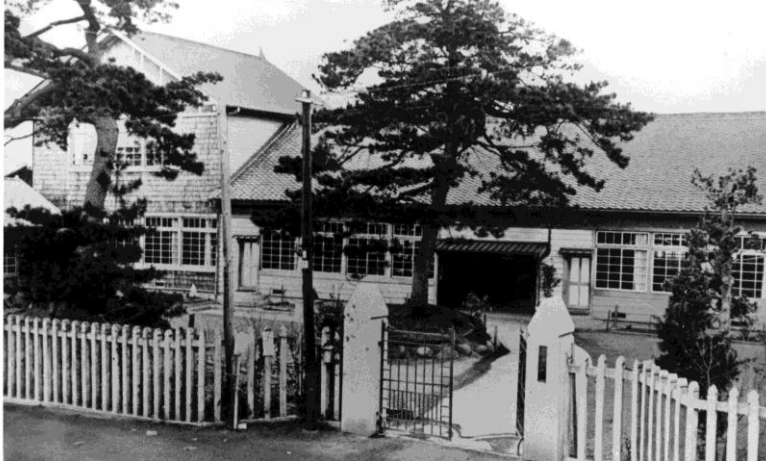
土浦市立博物館

令和元年7月2日発行(通巻第47号)

当館では「霞ヶ浦に育まれた人々の暮らし」を総合テーマに、春(5~6月)・夏(7~9月)・秋(10~12月)・冬(1~3月)と季節ごとに展示替えを行っております。本誌「霞(かすみ)」は、折々の資料の見どころを紹介するものです。展覧会や講座のお知らせ、市史編さん事業や博物館内で活動をしている研究会・同好会などの情報もお伝えします。

古写真・絵葉書にみる土浦(47)

古写真「大正13年に建てられた土浦幼稚園園舎」



大正13(1924)年に新築された土浦幼稚園の園舎です。イタリアのマリア・モンテッソーリが提唱した「子どもの家」を模範とした2階建ての園舎には、1階に保育室が4室と遊戯室が1室、2階には職員室があり、園庭には池もありました。昭和54(1979)年に建て替えられるまで使用されました。

【情報ライブラリー検索キーワード「学校」「幼稚園」】

## 目次

- 古写真・絵葉書にみる土浦(47)・・・1
- 博物館からのお知らせ・・・1
- 【夏休みファミリーミュージアム他】
- 古代の重要なカギ(古代)・・・2
- 先祖の足跡をたどって(近世)・・・3
- ふたつの「関之信肖像」(近世)・・・4
- モンテッソーリ教具(近代)・・・5
- 市史編さんだより・・・6
- 土浦藩土屋家の横顔(2)・・・7
- 霞短信 新館長就任のごあいさつ・・・8
- コラム(47)・・・8
- 情報ライブラリー更新状況・・・8

## 博物館からのお知らせ

★★系賀茂男の館長講座「館長が語る歴史物語」★★

テーマ：平安時代の政治・経済・社会・信仰(宗教)

会場：博物館視聴覚ホール 時間：午後1時~3時

7月28日(日) 「クニ(国)とコオリ(郡)とサト(郡・里)~行政単位の原点を探る」

8月25日(日) 「国府とその遺構~まつりごとの現場」

9月29日(日) 「郡衙とその遺構~常陸の郡衙跡散見」

※今年度の館長講座は、全10回通しての事前申し込み制です。受付は締切となりました。何卒ご了承ください。

【夏休みファミリーミュージアム】 7月20日(土)~9月1日(日)

会期中は展示品に関するクイズラリー(10問)も開催します。8問以上正解の方に、記念品をプレゼントします。

★★かすみ人形をつくろう★★ 親子5組。参加料200円(材料費)

8月1日(木) 午後1時30分~3時30分 完成品は8月18日(日)まで博物館で展示します。

★★戦争体験のお話をきく会★★ 定員30名。聴講無料(見学には入館料が必要です)

8月7日(水) 午前10時~10時40分(東京の空襲体験・海軍での仕事)

午前10時50分~11時30分(戦時中の代用品や服に触れてみよう)

※かすみ人形、お話をきく会のお申し込みは、7月9日(火)午前9時~電話または直接受付まで。

★★パネル展示「戦争の記憶を語る」★★ (入館料が必要です)

7月20日(土)~9月8日(日) アジア・太平洋戦争当時の思い出や体験談をパネルで紹介します。

※上記の他、「ミニ掛軸をつくろう」(7/23・7/30または31)、「親子はたおり教室」(8/23・24)などのイベントも開催いたします。詳しくは、当館までお問い合わせください。

★スタンプカード発行のお知らせ★  
イベントに参加された方に、スタンプカードをお渡ししています。集めたスタンプの数に応じて記念品をプレゼント!



博物館マスコット  
亀城かめくん

# 古代の重要なカギ

## —石橋北遺跡の海老錠—

土浦市内の東部に位置する田村沖宿遺跡群（おおつ野）では、今から30年近く前の平成2～4（1990～92）年にかけて大規模な発掘調査が行われ、数々の発見がありました。特に奈良～平安時代の出土品には特筆すべきものがあり、その一つに金属製のカギがあります。カギは移動可能な木製の箱や、米などを貯蔵した倉庫の扉に取り付けられ、当時から貴重品が厳重に管理されていた様子がうかがえます。

同遺跡群のうち平安時代の大集落である石橋北遺跡では、鉄製の海老錠と呼ばれるカギ（写真左）が見つかりました。茨城県内でのカギの出土例としては常陸国府周辺の、国が主導した鉄製品工場である鹿の子遺跡（石岡市）が知られる程度であり、大変貴重なものといえます。古代のカギは全国的にみても、都および地方の役所跡の周辺や、規模の大きな集落跡で目立って出土する傾向にあります。

石橋北遺跡で出土した海老錠は10世紀頃の竪穴住居跡の中から見つかりました。長さ5.5cmほどの直方体のカギの一部（筒部）で、鉄板を折り曲げて制作されています。全体の形状は、古代筑波郡の役所跡である平沢官衙遺跡（つくば市）に復元された、校倉造り倉庫の扉に付く海老錠が参考になります（写真右）。石橋北遺跡例よりも大きく、直方体の筒部の長さが12.7cmと倍以上もあります。カギの大きさの違いには、取り付ける対象の大小や、必要とされる耐久性などが反映されていることでしょうか。海老錠について詳しく述べれば、広義のカギを構成する錠前（英語で Lock）に相当し、挿し込む鍵（英語で Key）とともにセットで用いました。開け閉めするための鍵は遺跡内では見つかっていません。

石橋北遺跡の海老錠はその大きさから、櫃などの木製の箱の蓋に金具で取り付け、内部に入れた貴重品を管理したものと思われます。遺跡は50棟を越す竪穴住居跡と掘立柱建物跡で構成され、霞ヶ浦北岸地域では随一の集落規模を誇り、灰釉陶器などの交易品も多く見られます。この状況は、遺跡が地域における物資の一大集積地であった様子を示し、律令社会における地方の末端組織として、集落の統治者が居宅内で文書などを箱に入れ、カギをかけて保管したことを想像させます。（関口満）



海老錠（当館所蔵）



石橋北遺跡で出土した  
海老錠と同じ部分

海老錠の参考写真（国指定史跡：平沢官衙遺跡）  
（撮影協力 つくば市教育委員会）

8/24（土）10時・15時からこのページで紹介した資料の展示解説会を開催いたします。（30分程度）

下記の資料もあわせてご覧ください。（いずれも古代コーナーに展示）

- 市内出土の灰釉陶器（当館所蔵）
- 石橋北遺跡出土 三彩陶器（当館所蔵）



# 先祖の足跡をたどって

つちやともなお おんかふ  
—土屋寅直筆「御家譜」—

みなさんはどのようにご先祖様の功績を調べ、後世に遺しますか。江戸時代の人びとも先祖の功績が気になったようで、系図という形で後世に遺しました。今回ご紹介する「御家譜」(写真左)も、そのひとつです。

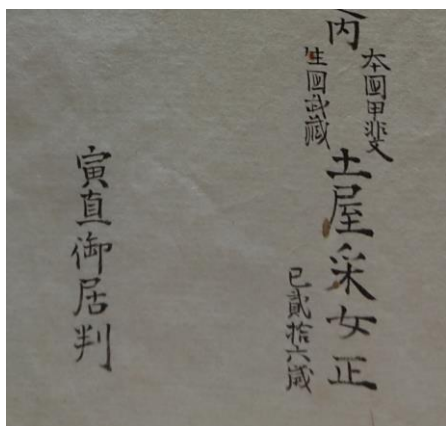
「御家譜」には土浦藩土屋家初代数直から寅直までの系譜が記されています。内容は勤めた役職や石高の増、将軍への献上と下賜の経歴が淡々と述べられています。ここでは初代数直と2代政直に注目します。

数直の出自は、「祖父土屋右衛門尉昌恒」と記されています。数直の祖父土屋昌恒(1556~82)は甲斐国武田家に仕え、武田勝頼(1546~82)が天目山で自刃した際には最期まで付き従い、迫り来る敵兵を防ぎました。この時の活躍は「信長公記」や「甲乱記」などの軍記にも取り上げられたほか、後世には「片手千人斫り」として知られるようになりました。この昌恒を系図に位置付けることで、武田家家臣の出自を意識していたことがうかがえます。

つづく政直の項は最も多くの丁数を割いています。政直は江戸幕府で老中を31年間勤め、将軍や諸大名との間でしばしば贈答が行われました。特に政直の事績は将軍への献上及び拝領が歴代当主で最も多く、中でも将軍から「御手自」下された品を政直が拝領したという記述が多く存在します。

さて系図の末尾を確認すると、「弘化三丙午九月寅直御居判」とあり、弘化3(1846)年9月に26歳の10代藩主寅直(1820~95)(写真右)が編集したものと分かります。また土屋采女正(寅直)の前には「本国甲斐生国武蔵」とあり、土屋家のルーツである甲斐国を本国と認識しています。寅直は9代彦直(1798~1847)の長男で、眼病を患った父の家督を18歳で継ぎました。彦直は水戸徳川家6代治保の三男であり、土屋寛直養女(英直娘)充子の婿養子となりました。

寅直は「御家譜」を編集することで、武田家家臣以来の土屋家の由緒と将軍家との関係性、そして養子である父も含めた自家の来歴を丁寧にたどり直したのです。(西口正隆)



「御家譜」(当館所蔵) 奥書



土屋寅直(『土浦市史』より)

7/27(土) 10時・15時からこのページで紹介した資料の展示解説会を開催いたします。(30分程度)

下記の資料もあわせてご覧ください。(いずれも近世コーナーに展示)

- 外丸絵図(文久元年)(当館所蔵)
- 立田郭建設に関する願書(享保2~8年)(当館所蔵)



# ふたつの「関之信肖像」

—土浦藩関流砲術の祖—

土浦藩関流砲術の祖、関八左衛門之信（1596～1671）の肖像は、顔に多くのしわが刻まれていることから晩年の姿のようです。動きやすいよう素襖の袖をからげ、左膝を立てて座り、右手には火縄銃、左手には火縄を構え、厳しい表情をしています。

之信は17歳の時、米沢藩の砲術家丸田盛次から火薬と張筒の秘伝を受けられ、22歳で印可状（免許）を受けました。若い頃から厳しい鍛錬を続けたからでしょうか、老年になってもがっしりした体型です。

違いを探るのが難しいほど似た描写の「関之信肖像」が、ふたつあります。之信没後、息子2人が引き続き砲術家として土浦藩に仕えました。長男昌信は土浦に家を構え、子孫は代々軍兵衛を名乗りました（軍兵衛家）。次男勝信は江戸で、子孫は内蔵助を名乗りました（内蔵助家）。内蔵助家は土浦藩士だけでなく他藩の藩主や家臣らに鉄砲を指南したため、関流砲術の門人は全国に及びました。

ふたつの「関之信肖像」は軍兵衛家、内蔵助家の両家にそれぞれ伝えられてきたものです。内蔵助家では、之信の命日に肖像を飾っていました。

清涼院様（之信の戒名）御忌日ニ付御膳相備申候、御絵像へ麦切相備、前夜御茶湯致候

（清涼院様のご命日なので仏前には膳を供え、肖像には麦切を供えた。前夜には肖像を飾った部屋で茶会を開いた）

（参考「年中行事」天保10年 関家文書）

麦切とは大麦の粉で作った麺で、うどんやひやむぎよりも短く切り、つゆをつけて食べる夏のごちそうです。内蔵助家では之信だけでなく、9月26日は香雲院（勝信）、12月23日は浄雲院（逸信）、3月8日清運院（依信）など先祖の命日に肖像を飾って供養を行っていました。軍兵衛家でも同様にしていたことでしょう。故人を偲び、先祖を祀るのに欠かせないのが肖像でした。

（木塚久仁子）



内蔵助家に伝わる「関之信肖像」（個人所蔵）

8/10（土）10時・15時からこのページで紹介した資料の展示解説会を開催いたします。（30分程度）

下記の資料もあわせてご覧ください。（いずれも近世コーナーに展示）

- 「年中行事」天保10年（個人所蔵）
- 大筒「谷神」天保14年（市指定文化財・個人所蔵）



# モンテッソーリ教具

## —土浦幼稚園に伝わる教材—

明治18(1885)年に茨城県で最初に開園した土浦西小学校附属幼稚園(現土浦市立土浦幼稚園)には、明治・大正・昭和期の教材が多数残されています。明治期に日本へ伝えられた「二十恩物」については、「霞」2号(第一恩物)、25号(第十二恩物)、28号(第三～六恩物)でふれました。今回はモンテッソーリ教具と呼ばれた、大正期に伝えられた教材についてご紹介します。

モンテッソーリ教具は、マリア・モンテッソーリ(モンテッソリとも)(1870～1952)により考案されたものです。モンテッソーリは、イタリアの医師で教育家であり、障がい児教育を研究した近代イタリア初の女性博士でもありました。なかでも感覚訓練のための教材は、物事の理解を深め、精神的にも安定を得られるよう、子どもの発達に即した作業を与えて五感の発達をうながすものでした。現代でもモンテッソーリ教具を導入している幼稚園は全国に見られます。

フレーベル館が大正10(1921)年頃に発行した『幼稚園家庭用 保育用品目録』には、「モンテッソーリ教授用」として、視覚練習・触覚練習・筋覚練習・聴覚練習の教材が15種掲載されています。土浦幼稚園には、これに相当する教具が13種伝来しています。

「聴覚練習 音筒」(写真上。現代のモンテッソーリ教具では「雑音筒」にあたる)には、「金属、石片、木片、貝殻、穀類、鈴を入れたる六種の筒あり 雑音の練習とす」という解説がついています。土浦幼稚園の「音筒」には、釘・小石・棒・巻貝・豆・鈴が木筒に入っており、蓋をして振り、音を聴く仕組みです。音を聴き分けるには、静寂な空間が必要であり、子どもが、自発的に黙って耳をすまし、中身の性質を知ることを行なう教材です。



「聴覚練習 音筒」  
(土浦市立土浦幼稚園所蔵)

教具は基本的に1セットずつ残るため、実際の使用頻度などは明らかではありませんが、紐の結び方やボタンのかけ方を練習する「布框」(写真下。現代のモンテッソーリ教具では「着衣枠」にあたる)には「太鼓組」などクラス名の墨書が残り、実際に保育の現場で使用されていたことがうかがえます。



「布框」(土浦市立土浦幼稚園所蔵)

土浦幼稚園では、大正13年には、モンテッソーリが提唱した「子どもの家」を模範とした園舎も新築しました。先進的な保育環境と教材をともに取り入れていたのです。(野田礼子)

8/3(土)10時・15時からこのページで紹介した資料の展示解説会を開催いたします。(30分程度)

下記の資料もあわせてご覧ください。(いずれも近代コーナーに展示)

- 『たまき』第3号(個人所蔵)
- 園舎の屋根飾り(土浦市立土浦幼稚園所蔵)
- 園舎の外壁板材(土浦市立土浦幼稚園所蔵)



# 市史編さんだより

## 『土浦関係中世史料集 下巻』と梵字<sup>ぼんじ</sup>

今年3月、『土浦関係中世史料集 下巻』が刊行されました。上巻刊行が平成27(2015)年3月ですから、4年かかって上下巻が揃ったこととなります。

今回は、下巻の編集作業で見てきた梵字について紹介しましょう。梵字といえば、石仏などの調査で見られる「キリーク」(図1)が有名で、<sup>あみだにょらい</sup>阿弥陀如来を示すとされます。仏教、特に最澄や空海が伝来させた<sup>みつぎょう</sup>密教との結びつきが強く、古代サンスクリット語の基礎にもなった文字です。今回の史料集では、市内の真言宗寺院に関わる史料、特に印信<sup>いんしん</sup>(<sup>しそ</sup>師僧が秘法を伝授した証として弟子に授与する書)や石塔で使用されています。密教では一文字で仏の名を意味し、さらに組み合わせられて仏の言葉(真言または陀羅尼<sup>だらに</sup>という)にもなります。

編修者である雨谷昭氏は、『梵字事典』・『修験道要典』の<sup>しゆげんじんびぎょうほうふじゆしゅう</sup>「修験深秘行法符咒集」・『密教大辞典』・『仏教語大辞典』などを参考に各所で注釈を付けて読み方や意味などの解説をしています。

下巻では80種類以上の梵字が100ヶ所以上も出てきているので、確認作業だけでも大変でした。また、普段の生活で目にすることがない文字のため、校正作業は底本と見比べる、という基本的な手法で行いました。

最終的な確認作業では、『梵字辞典』や『密教大辞典』を使うことになりましたが、何度も見るうちに、文字の規則性が分かってきました。図2は胎蔵界五仏<sup>たいざうかいごぶつ</sup>を表すものですが、同時に梵字「ア」の変化を見ることができます。ちなみに梵字「ア」は胎蔵界大日、「アー」以下は胎蔵界四仏<sup>ぼうどう</sup>[<sup>ほうどう</sup>宝幢如来・<sup>かいふけおう</sup>開敷華王如来・<sup>むりょうじゆ</sup>無量寿(阿弥陀)如来・<sup>てんく</sup>天鼓雷音如来]で、大日如来が中央、四仏が東南西北四方の守護仏です。

読み方の変化とともに梵字も変化しています。この変化は他の音でも同じパターンがあります。図3は「バ」と「バン」です。「バン」では「アン」と同じように、上に点が付いているのが分かります。バはバンとも書きます。「アー」のように右上に「ク」が付くと伸ばし、「アク」のように右側に「:」が付くと「Ok」と読みます。

これらの梵字を用いた真言の例として、「光明真言」(図4)があります。葬式や法事の時に唱えることもあるので、聞いたことがあるかと思います。「オン」(オン)から始まり「ウン」(ウン)で終わります。『広辞苑』では「梵字」の項に光明真言が書かれています。ちなみに「光明真言」の項には「唵(おん)阿謨伽(あぼぎや)尾盧左曩(べいろしやのう)摩訶母捺囉麼拏(まかぼたらまに)鉢納麼(はんどま)入嚩囉(じんばら)鉢囉鞞哆野(はらばりたや)吽(うん)」と載っています。一般に流布している読経の教本などでは仮名のみで表記されているため、梵字を見る機会はないのですが、本来は図4のような文字で表記されていたのか、と驚きます。今回の史料集の中には活字の辞書になく、複数の梵字から作字した梵字もあります。『梵字辞典』などを見ていくと、さらにその奥深さを知ることができます。(市史編さん係 江島万利子)



図1 キリーク



図2 胎蔵界五仏

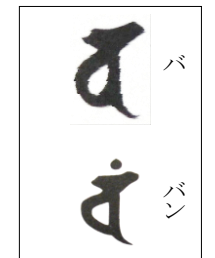


図3 バの変化



図4 光明真言  
(広辞苑「梵字」より)

# 土浦藩土屋家の横顔

このコーナーでは、土浦城を200年治めた土屋家の歴代藩主を、系譜を読み込みながらご紹介します。基本的には『寛政重修諸家譜』を用い、「土屋系図」（『茨城県史料 政治編4』所収）で補足しました。引用はゴシック体で示しています。（）は筆者註です。



## その二、土屋政直【つちや まさなお】

左門 能登守 相模守 従五位下 侍従従四位下

母は（水野石見守）忠貞が女。

寛永十八年生る。（享保七年十一月）十六日卒す。年八十二。俊翁道耆徳相院と号す。

室は松平若狭守康信が女。継室は六條中納言有知が女。

### 遺領を継ぐ

承応三年五月二十三日はじめて巖有院殿（家綱）にまみえたてまつる。（中略）延宝七年五月十日遺領を継、六月十一日襲封を謝するとき、父が遺物備前兼光の刀、癡絶筆の書幅を献ず。

政直（1641～1722）は、土浦藩土屋家2代当主です。13歳、将軍家綱に拝謁し、14歳、従五位下能登守に叙任、21歳、相模守に改めました。延宝7（1679）年5月10日、35歳の時に父数直の遺領を継ぎました。この際、政直は将軍へ感謝の印として、父数直の遺品であった備前兼光の刀と、癡絶（江戸時代前期の曹洞宗僧侶）筆の書幅を献上しています。

### 老中へ就任

（貞享）四年十月十三日老中となり、二十一日田中をあらためて旧土浦にうつされ、常陸國新治、筑波、信太、茨城、和泉國大鳥、和泉、日根、近江國伊香、下総國相馬九郡にをいて六萬五千石を領す。

天和2（1682）年2月12日、政直は土浦藩から駿河國田中藩へ領地替えとなります。政直は駿河國志太・益津・遠江國榛原・城東・上総國山辺・常陸國茨城六郡に4万5千石の所領が与えられました。この時には田中藩の領地を訪れるために暇も与えられました。その後貞享4（1687）年に京都所司代から老中へ昇格すると、政直は再び土浦藩へと領地替えを命ぜられ、2万石を加増した6万5千石の所領が与えられました。

### 藩の礎を築く

（享保）三年三月三日政直重職にある事三十年余、齢も八旬（80歳）にちかきにより職をゆるさるといへども、猶しばしば登營すべきむね恩命を蒙り常陸國筑波、下総國相馬二郡において一萬石を加賜せられ、すべて九萬五千石を領す。

政直は老中の職を31年にわたって勤めました。享保3（1718）年3月3日に職を退くことを許されましたが、それでも度々登城すべきとの命を受けました。長きにわたる幕府政治への尽力から、幕府から石高9万5千石が与えられました。以後、土浦藩土屋家はこの石高を維持して藩を治めました。余談ですが、歴代藩主の逸話集「御代々様逸話」によれば、政直は加増や将軍家からの拝領、吉事を伝える際には、必ずご先祖様の武功のおかげと述べていた、と記されています。後世において、政直が功績を自身のみの成果としない謙虚な人物として語られていたことがうかがえます。（西口正隆）

「霞短信」コーナーでは、博物館活動に関わる方々の声やサークル活動記録などをお伝えしております。

今号は、今年度より当館の新館長に着任しました糸賀茂男が、土浦と博物館への思いを語ります。

## 就任のごあいさつ

去る4月1日より土浦市立博物館と上高津貝塚ふるさと歴史の広場（考古資料館）の館長に就任いたしました、糸賀茂男です。

筑波山麓に生まれ、育ち、今も暮らす私にとって幼少時、土浦は「夢」の街であり、砂利道をバスに揺られ行くときの浮き立つ思いは今も忘れられません。お店・映画館・食堂など、農村からみると土浦は本当に「夢」の世界でした。筑波線で高校に通い、さらに土浦駅から東京へ、帰省時はまたバスで生家へ、と、私の青春時代の往復路は、必ず土浦を経由したものでした。平成元年、水戸の新設大学に着任（歴史学担当）し、常任理事として大学経営の渦中にも身を置きました。同時に県内外の自治体史編さんに携わり、果ては“学園百年史”を編集・刊行して定年退職となりました。

その後、書き溜めた論文を本にまとめて学位を取り、これまで同様、文化財保護活動（茨城県・土浦市・桜川市など）や社会人対象の歴史講座を通して、社会貢献を続行中です。

このような私にとって、「博物館」はかけがえのない「驚きと発見の場」です。つまり、「観て」「驚いて」「考えて」「気付いて」の連続です。歴史の学習に王道はありませんが、「物（もの）事（こと）」に対する自分の「思い（印象）」こそ、真の“師匠”なのかもしれません。これからも多くの「物と事」に込められた意匠の見事さを見出し、かつ館内学芸員諸氏の内に秘めた熱い思いを見つめていきたいと願うばかりです。

皆様、「亀城※（博物館）」と「上高津※（考古資料館）」へ折々お出かけ下さい。そして、大いに“わがふるさと”を感じ取りましょう。

（土浦市立博物館長 糸賀茂男）

※「亀城」「上高津」は、館長が名付けた博物館、考古資料館の愛称です（編集註）。

## コラム (47) 廃棄される古文書

古書店や古美術店のカタログが、毎月何冊も博物館に届きます。頁を繰って「よくぞこれだけ古文書や書籍が存在するものだ」と感心しつつ、土浦関連資料を探します。

先日、講演会を聴講しに来てくださった青梅市の方から、こんな話をうかがいました。「古書店をやっている知り合いがいるが、売れなかった古文書は保管する場所がないので廃棄してしまうそうだ」と。A書店のカタログで2万円の価格で売られていた掛軸が、B書店のカタログでは7千円に値下げされていたことがあります。売れなければ価格が下がっていくのは仕方ないと思っていましたが、その末に廃棄されてしまうことには、思い至りませんでした。保管場所がないのは古文書だけでなく、すべての歴史資料にとって致命的なことです。売れない古文書が捨てられてしまう状況に歯止めをかけることはできませんが、やるせない気分になりました。

（木塚久仁子）

## 情報ライブラリー更新状況

【2019・7・2現在の登録数】

古写真 597点（+1）

絵葉書 509点（+1）

※（ ）内は2019年5月11日時点との比較です。展示ホールの情報ライブラリーコーナーでは画像資料・歴史情報を順次追加・更新しております。1ページでご紹介した古写真・絵葉書もご覧いただけます。

霞（かすみ） 2019年度

夏季展示室だより（通巻第47号）

編集・発行 土浦市立博物館

茨城県土浦市中央1-15-18

TEL 029-824-2928

FAX 029-824-9423

<http://www.city.tsuchiura.lg.jp/section.php?code=43>

1～5ページのタイトルバック（背景）

は、博物館2階庭園展示です。

2019年度夏季展示は、2019年7月2日（火）～9月29日（日）となります。「霞」2019年度秋季展示室だより（通巻第48号）は2019年10月1日（火）発行予定です。次回の来館もお待ちいたしております。

※展示室だより「霞」は、当館ホームページからもご覧になれます。（カラー版）